

-2-

応しようとする若い世代は家庭、学校、政治へとその断絶を拡大している。筆者が本年4月まで在任したチュラロンコン、タマサート両大学でも学生の社会革新の動きはますます高まりつつある。大学の講義の中には国王の偉業を称える国史のように寺院教育の伝統を継ぐ講義がある。三時間に及ぶその期末試験で学生は全内容を棒暗記して記述する。他方、欧米人と日本人の客員教官の中には比較政治社会史に講義の重点を置く人々がいる。学生が両者を比較し、批判することは当然であろう。欧米教育を受けた若いタイ人教官達はその間にあって二面性を使分ける行動様式を身につけるようになる。

人文科学系学部に関する限り、学部長の他に主任級の少数の教授、助教授がいるが、大部分の教官は専任講師である。一般に彼等是他学部の一般教育科目を兼担し、週18-20時間講義する。事務経費を除く教官研究費はない。また彼等の昇格には研究業績よりも教育者としての評判が役立つ。これらの要素は大学が研究よりも教育機関に重点を置いていることを示している。

学会の歴史研究活動も貧弱である。Siam Societyは毎週木曜夜に例会を開くが、発表者は在留欧米科学者、外交官、財界人が多く、聴衆も欧米人が大部分である。チュラロンコン大学のアジア研究所は月例研究会でかなり活発な討論を展開しており、その年報には政治、社会関係の学術論文が載っているが、歴史分野をふくまない。文学部には地歴学科はあるが研究会はない。学部紀要に教官の論文を載せているが、タイ人の論文は註がないので、筆者の独自の意見はどの部分か明らかなでない。その他の出版物では、芸術局調査報告書、史料編さん所紀要等を除けば、学術専門書はまれにしか出版されない。購読層がないためである。

科学的な歴史研究を妨げる他の原因は言論出版統制である。共産主義を非合法とするこの国では思想調査、検閲制度が厳しい。昨年ある外人教官が講義の中で、「仏教は経済発展の阻害要因だ」と述べ、これが問題となって彼は学期半ばに帰国した。現在では沈黙は美德だと心得る教授達が多い。歴史研究の分野は国王の偉業と仏教の世界を称える歴史記述を批判する状況にない。このような環境の中で彼等は自分自身の保身の途を見出している。しかし周囲の社会が変貌し、実社会へ巣立つ若い世代がその批判力を増しつつある時に、彼等は果してどのような反応型、変り身を示すか。この点についてもタイ人歴史家達は微笑しながら何も語ろうとしない。

バリ島のカースト制度など

河部利夫

1月4日の昼下がりに、タイ国際航空機はしだいにバリ島のデン・パサール空港にありはじめた。

波頭の白い環にとりまかれた小さな島が紺碧の海の上に浮んでいる。ああ、とうとう着いたかと、これまで何回かの東南アジア旅行のなかで、いつも行きそびれていた、このあこがれの島への第一歩にはひとしおの感慨をおぼえた。

バリ島はこれまで外国の人びとから、いろいろな表現でよばれている。「楽園の島」、「熱帯の珠玉」などとたたえられ、1954年ここに遊んだネルーは、バンドン会議の提唱者として、「世界の朝」と感慨をこめて名づけている。また、1966年サヌール海岸に建てられた豪華なバリー・ビーチ・ホテルの開店の時は、「明日の島」と呼ばれインドネシアの未来の発展を祈ったのである。また、古くからサンスクリット語由来のブラウ・デワタ (Pulau Dewata) すなわち「光の島」ともいわれきたし、小さな島に約1万に及ぶ寺院 (プーラ) が群立している光景から「数多くの寺院の島」とも形容されてもいる。

まさに、空から見ても高層なホテルの窓から見ても鮮烈な光りのなかに輝いているし、ヒンドゥー教と仏教の混交した古いジャワ文化がここに凝縮しているかの如く、全島いたるところに過去の静寂がただよっている。イスラム化し西欧化して現在にいたっているインドネシアのざわめきのなかで、このみは棚田の米作で自給自足し、海の幸山の幸で大らかな生活がいとなまれているようだ。

ホテルにおちついて、ロビーに出たとき近づいたボーイに習いおぼえたインドネシア語で、「スラマト・スィアン」(今日は)と挨拶した。そのとき、彼がバリーでの独特の挨拶ことばを教えてくれた。すなわち、両手で合掌しながら「スワスティ・アストゥ」というのである。これを聞いて驚いた。タイでの挨拶と全く同じだからである。タイでは、「サワット・ディー」といって合掌(ウイ)する。この日の午前9時、その挨拶をしながらバンコク郊外のドン・ムアン空港を飛びたった私であった。このひとことで、ヒンドゥー・仏教的バリー文化の本質にふれる思いがした。

そうして、この後4日間の滞在は、タイでの経験と理解をよりどころにしながら、十分にバリ島の文化景観や習俗を味得することができたようであった。大小さまざまなプーラ(寺院)、ラーマ・ヤナ物語に因む古典舞踊、農耕にまつわる土俗舞踊、精霊祠のある風景、村長の家にある木鼓など、稲作文化とアニミズム、それにおおいにかぶさっているヒンドゥー・仏教文化から、バリーはジャワよりもタイに近いことを痛感するほどであった。

そうした、いろいろの見聞のなかで注意をひかされたのがカースト制度の存在であったのだ。

一人のインフォーマントと話している間にカースト的な制度がまだのこっていることを知った。それを彼はつぎの4階級として書いてくれた。(1) Brahmana, (2) Kesatria, (3) Swesa, (4) Isudra.

— 4 —

である。

そして第1階級の *Brahmana* では、男は *Ida Bagus* を、女は *Ida Aju* を姓名の前に付す。第2階級 *Kesatria* のものは、それぞれ *Tjokorda* (男), *Anak Agung* (女) を付し、第3階級 *Swesa* では *Gusti*, 第4階級では *I* (イー) を付している。

例えば、一人のガイドからもらった名刺に *I. B. Oka Abianha* とあり、木彫店の主人の名刺に *I. B. Sukeri* とあったが、その *I. B.* とは *Ida Bagus* すなわち第1階級 *Brahmana* の男であることを示すカーストの *status title* である。そしてまたインフォーマントのいうところによると、上の階級の男が下の階級の女と結婚することはできても、下の階級の男は上位の女と結婚はできないと、このことは現在でも厳しく守られているともいっていた。そして、外国人にはわからないけれども、バリ—の土着の人間にとっては、誰がどの階級に属すかはよくわかっているともうべた。

ホテルで買った、インドネシア政府情報局のバリ案内 (*Department of Information, Bali—Isle of Temples and Dances*, 4th ed., 1967) の第3版の序文では、バリ—の *Caste-system* の4つの階級というのはただ名称のみが残っていて、現在ではすべてのバリ—人はその天分能力に応じてどんな職業でも選択することができると、説明している。そしてまた、カースト的社会構造はバリ—ではすでに弛緩しており、社会生活から間もなく消えてしまうであろうともうべている。しかし、この表現のなかには、民主主義を標榜する政府の事実認識に対する戸惑いによる評価があるといたい。バリ—にカースト制が残存することは事実である。

問題はそれがどのように、どの程度にはたっているかである。帰国後、*O. Geertz* のバリ—調査に関する論考を読む機会をえた (*Clifford Geertz, Person, Time, and Conduct in Bali: An Essay in Cultural Analysis*, Yale University, 1966)。その第4章 *Balinese Order of Person—Definition* のなかの *Status Titles* の項で、ギ—アツもカースト制に関連する *title* 名をあげている。(*Ida Bagus*, *Gusti*, *Pasek*, *Dauh*, etc. として)。そのうち筆者の調査とは照合しないタイトルのことはさておいて、「バリ—での *status* は *a Personal Characteristic* であって、如何なる *structural factors* でもない」としている評価は有力な視点ではないかとも思った。

というのは、ギ—アツはこの島の4つの村の集中調査の結果、32種類のタイトルを見つけ出し、そのうち最多のものは250人、最少は1人が所有していたとのべ、「重要なことは *status title* は決して集団につけられているのではなく、個人にのみ付せられている」としている (*O. Geertz Tihingan: A Balinese Village, Bijdragen tot de taal-, land- en Volkenkunde*, 120, 1964)。

これは、あたかも 1932 年立憲革命後廃止された、タイの貴族的官位名（サクディ・ナー⇒権威田制に因る）のチャオビヤー、ビヤー、プラ、ルアン、クンなどが現在ではもはや階層的集団帰属の意義を失い、ただ個人的レベルでの権威の残滓を示す程度のもとなっているのに類するものであろう。廃止後は個人の姓名のなかにくみ入れ固有名詞化することを許したので、上位のものにはそれを温存しようとしたものが多かった。例えば、Phya Anuman Rajadhon などその典型である。

ともあれ、バリ島の存在は東南アジアのある時期の歴史研究の実証を今日的に把握しうる場として、特異な意義をもっていることが注目されよう。ここには、イスラム化以前のインドネシアが現存している。すなわち、インド化した時代の過去がそのまま続いているところに、大きな歴史的資料としての価値をもつ。ここでは、オランダの植民地主義もそれほど浸透しなかったようだ。史跡として古い習俗の展示館として、むしろ過去を温存するという配慮を感じるほど、人びとの生活、举措がおおらかである。

そして、人びとが、そうした古い文化を維持していることに対する誇りも大きい。本当のインドネシアはバリーにあるという自画自讃の声も高かった。それ故、彼らはジャワ島の現状には我慢ができないらしい。イスラム化し、西欧化したジャワ、そこに鋭く異質性を感じているのか、筆者の「外国人」をどう呼ぶかという質問に対し、「オーラン・ジャワ」(Orang Djawa)と書いてくれたインフォーマントの答は大へん興味深かった。しかし、これは必ずしもあたらない意識であるともいえる。

というのは、バリー旅行の後ジャワの西部海岸の古都バンテンから、中部・東部への横断旅行を自動車で行ない、ボロブドゥールやプランバナンの遺跡、ジョクジャカルタのサルタン王宮、スラカルタからソロ川にいたる長い旅のなかで、ジャワは依然としてヒンドゥー・仏教的文化が濃厚で、イスラム化の程度は表皮的ではないかとも思った。それは、大陸部、そしてとくにタイを中心としての地域研究の筆者の眼による付会かも知れない。それは歴史的遺産を今日的に考えすぎているのかも知れない。

しかし、過去と現在、ヒンドゥー・仏教文化とイスラム文化、インドネシアの今日をもう一度考えてみたいと思ったのが、今回のインドネシア旅行の結びであるといっておかろう。

< 新刊の東南アジア関係書目数種 >

東南アジア研究の急速な発達には研究文献のおびただしい増加となって現われ、ことに最近の業績